

中国における自閉症スペクトラム児童の就学支援について

呂曉彤

Xiaotong Ro

帝京科学大学

Teikyo University of Science

Key words:中国, 自閉症スペクトラム児童, 就学支援

目的

2008年、中国障害者保障法が改定され、障がい児童の就学状況は大幅に改善された。しかし、自閉症スペクトラム児童の就学は大いに問題があった。その理由は自閉症スペクトラムの診断および障害名にあった。「精神障害」と位置づけられた自閉症児をもつ親は精神病として扱われるのが不満・不利益と考え、福祉手帳を申請せずにいた。よって、多くの自閉症児童は通常学校も特別支援学校にも入学できず、谷間に置かれているのが現状である。

報告者はこれまで、中国における民間自閉症児療育施設の状況を把握し、母親の育児不安・ストレス・不満などが大きなストレス原因であることを検討し、母親の育児支援・発達支援についてのニーズ明らかにしてきた(呂2006)。本報告では、民間自閉症児療育施設の療育指導を受けている学齢期自閉症児の現状を明らかにすることを目的とした。

内容

1. 調査の方法

本調査では、2015年8月6日～9月25日まで、これまで継続して調査研究を行っている中国中心地方の北京市と北部地方の大連市と西部地方にある西安市にある民間自閉症児療育施設3ヶ所に通園していた6歳以上の学齢期自閉症児の母親49人を聞き取り調査の対象とした。

2. 結果

対象児童はすべて男児であった。子どもの年齢は平均7.5歳、全員自閉症スペクトラムであった。障害の発見時期については、2歳ごろであった。

就学相談に関して相談先がなかったが、学校に直接交渉しに行ったという回答がほとんどであった。

また、母親の状況として、母親の平均年齢は28歳であった。学歴は今までの調査と同様に、多数が大学卒業以上であり、健康状況は全員良好であった。母親全員仕事をやめていた。

対象児童は、学齢児でいながらも、9月から就学先が決まった2人を除き、47人は就学できず、民家施設に頼っている状況にある。学校にいけない状況を聞いたところ、知的障がいに伴う自閉症スペクトラム児童は特別支援学校に行きたくない、または手帳を申請していないために、特別支援学校に行けない。特別支援学校に行きた

くないのは、教員の質を信頼していないからで、また、手帳を持っていない児童の母親は、「精神障害」だと言われたくないからである。

中国における自閉症児をもつ母親の苦痛は、これまでの調査と同様に、わが子の就学・将来に対して大きい不安・ストレスを抱えていることであり、それが全く解決されず、生涯にわたる発達と生活の支援を強く求めている。

考察

2014年中国障害者事業発展統計公報によって、2014年末までに、全国リハビリセンターを6,914ヶ所(障害者联合会附設2,622ヶ所)までに増やし、41ヶ所の行政地域に自閉症リハビリ施設を設立した。約20万人の自閉症児童がリハビリを受けていたと言われている。また、2006年に学校教育法施行規則が一部改正され、いわゆる「通級制の弾力化」が図られ、自閉症、学習障害(LD)、注意欠陥・多動性障害(ADHD)も対象とされるようになった。通級児童生徒のうち、3分の1は自分の学校に設置された教室に通う「自校通級」であり、残りの3分の2は、他校に設置された教室まで出向く「他校通級」を余儀なくされている。親の会など諸団体の活動の中でも、通級担当教員の増員と専門性の向上のための取り組みを求めている。

どこかで、発達障害児教育に関しては、乳幼児診断システムがなく、就学前教育はいまだに民間療育施設に頼り、入学困難および学校教育における教員の専門性の欠如、進路指導の困難さ、成人施設の皆無というのが現状であることは明らかであった。

参考文献

1. 李永・陳潔：自閉症児童インクルージョン教育を受ける期間中の困難に関する研究、『中国科教創新導刊』、第36期、2008
2. 王穎：自閉症児童における特別支援学校の就学支援システムについて、文教資料(文部科学省資料)、2009
3. 呂曉彤：中国における自閉症児の母親の育児困難の実態と発達支援ニーズに関する研究、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所博士論文、2006
4. 呂曉彤：中国における「随班就讀」のシステムについて、帝京科学大学紀要、第10巻、pp159～pp162、2014
5. 中国随伴就讀網、<http://www.tjzx.sh.cn>